
この先にあるもの

山村 歌音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この先にあるもの

【Nコード】

N0038Y

【作者名】

山村 歌音

【あらすじ】

“1人じゃない”、
そう思える
仲間がいた

第1話

西の方の空がオレンジ色に染まってきた。

私はその景色を、宿の窓から眺めていた。

ふと下を見ると、2人の親子がいた。

2人とも楽しそうに笑っている。

そんな様子が、少し羨ましいと思う。

……私には、一生できないような表情だから。

少し風が強くなってきたので、窓を閉め、鍵をかけた。

そして鞆から硬貨入れを取り出し、夕日が射し込んでいる部屋を出た。

この宿は、少し古い宿。

1階は広間とよばれ、玄関や食堂などがある。

2階と3階は宿泊部屋で、両方合わせて50ほどの部屋がある。

宿にしては、それなりに広い。

私が1階に下りていったときには、すでに何人もの人が夕食をとっていた。

大きな木のテーブルを大勢の人が囲んでいる。

私はあまり人込みが好きではないので、1人席に座った。

「ご注文は？」

薄緑のワンピースの女性が、お皿を拭きながら言った。

「サンドイッチ。レタス入りのやつがあつたら、それで」

「かしこまりました」

女の方は、食堂の奥にあるキッチンらしきところに入っていった。後ろを見ると、お酒に酔って暴れている男の人がいた。

40代くらいだろうか。

顔がかなり赤くなっているので、相当お酒を飲んだのだろう。

あんな人には関わりたくないな。

関わって、ロクなことがな……

「嬢ちゃん、旅人？」

…… かった。

見ただけでも酒臭くなるこの男。

近づくと、やっぱり酒臭い。

酒臭すぎる。

「旅人って、それなりにお金あるんだろお？ なあ、半分でいいから、分けてくれよ、なあ？」

半分でも十分高いわよ。

そんなことを心で思いながら、酒臭い男を相手してあげた。

「お金を要求するなら、国の防衛官に引き渡します」

「おお、怖いな」

その後、すごい視線で睨むと、男は人込みの中へと消えていった。

「お待たせしました、サンドイッチです」

さっきの女の人が、レタスとトマトが挟んであるサンドイッチをテーブルの上に置いた。

私はそれを両手で持ち、食べ始める。

「……レタスおいしい」

ボソッとつぶやいた。

第2話

部屋に戻る。

扉を開けると、窓から月明かりが射し込んでいた。

ランプをつけなくても、十分に明るい。

硬貨入れを鞆の方に投げ、私はふつかふかのベッドに飛び込んだ。

昨日は……いや、今日の夜明け前まで、地図を確認しててほとんど眠れてない。

風向きや距離を推測したり……。

考えるだけで嫌になるような計算ばかりだ。

ああ、もう睡魔がソコまで来てる。

だんだんと視界が薄くなる。

明日は、食料を買おう。

ついでに、方位磁針も買いたい。

でも、森を越えないと……。

森の野宿だけは避けたいな。

もう、これは明日考えよう。

そうして、私は眠りについた。

……物音で目覚めた。

私は小さい頃から寝相が悪いので、また何かを蹴ってしまったのか
と思い、ゆっくり起き上がる。

予想通り、足元には水入れが置いてあった。

ガラスでできているので、きっとその音だったんだろう。
鞆の中にしまつて、また眠りにつく。

この眠気なら、どんな騒音でも寝れる気がした……が。

……何か気配がする。

人の気配……？

いや、ここには私以外いないはず。

つてことは……盗賊。

短剣は枕下、ベッド下、服のポケット、鞆の中に数本……。

1番に枕下で、取り上げられたらポケットの短剣。

次はベッド下で、万が一のことがあったら鞆の短剣を使おうか……。

そんなことを考えた直後、静寂を破る人の声がした。

「起きてる……よね？ 盗賊にしては気配がありすぎるよね、オレ」

その声を聞いた瞬間、私は飛び起きた。

それと同時に、枕下の短剣も取り出す。

それを、声のした方に向けた。

……そこには、1人の少年がいた。

第3話

「……誰」

短剣を握る力が強くなる。

「さつき、盗賊って言ったよね。それは本当？」

「そうそう。盗賊団の1人ってこと」

頭を掻きながら、盗賊は言った。

私と同じ年くらいだろうか。

私より背が少しだけ高い。

上下共に、濃い青の絹の服で下は膝丈。

盗賊の誇りの黒マントは着ていない。

「もう1つ。どこから入ってきた？」

「この窓。盗賊は窓から入ってくるのが基本だろ？」

そんなこと訊かれても知らないし。

この盗賊、何も持っていない。

窓から入ってくるとき用などのロープも、短剣も。

よほどの自信家か、それとも……

普通の盗賊なら、今の状態と立場は逆だ。

盗賊が短剣で脅し、仕方なく脅された側はお金を渡すことになる。

私なら渡さないが。

そもそも、盗賊は旅人なんて狙わない。

少し身分が高い人や、少人数暮らしの庶民を狙う。

「なぜ、私を襲う？ お金は庶民の方がある。旅人はお金なんてほとんどのないのに」

「そう言われると難しいな。これを話したらちよつと……」

盗賊は苦笑いをした。

事情はあるが、話せない……と。

「とりあえず、この状況わかってる？ 素直に答えなきゃ、殺られるか国の方へ強制になるのよ？」

「素直に答えなきゃ、殺られるか国の方へ強制になるのよ？」

「国の方……か。嫌だね」

「じゃあ、出て行って」

これで断ったら、本当に国の方へ行かせてやる、そう思ったら。

「はいはい、出てればいいんだろ？」

意外にも、あっさり認めた。

盗賊は窓に座った。

強めの風が窓から吹き込んでくる。

「……そうだ、思い出した。君の名は？」

「名を述べるときはそちらから」

なんて、盗賊が名のるなんて馬鹿なことはいらない。

……普通なら。

「オレはアラシ。はい、名のった！」

「……エル」

小さく呟くように言った。

「エル……ね」

一瞬、アラシの口角が上がった。

「いい名前じゃん」

それだけ言っと、アラシは座っていた窓から飛び降りた。

短剣を投げ、慌てて下を見る。

ここは2階。

いくら盗賊とはいえ、何もなしでは危険な高さ。

その下には。

何もなかったかのように、ただ風が吹いていた。

第4話

朝になった。

窓から眩しすぎるほどの朝日が射し込んでいた。
軽く背伸びをして、窓を開ける。

まだ少し、肌寒い。

窓の下を見て、ふと昨日の出来事を思い出す。

盗賊の……アラシ。

盗賊だけど庶民に目つけるし。

盗賊だけど何も盗まないし。

盗賊だけど名前を名乗るし。

とにかく、変な盗賊だった。

あんな変に会うなんて、私って珍しい。

あの侵入には、何か目的があっただろうか。

どこから入って、どうやって消えたのかもわからない。

とにかく、考えさせられるような行動ばかりだった。

あれこれ考えているうちに、市場が開く時間になってしまった。

村の人も、何人か外に出ている。

窓を閉めて、硬貨入れを鞆から取り出そうとしたときだった。

「……何これ」

鞆の近くに、石のようなものが転がっていた。

昨日の鞆を整理していた夕方にはなかった。

ダイヤの形で、エメラルドに近い色をしている。

こんな石、見たことない。

もしかしたら、ものすごい価値がつくものかもしれない。

そのとき、ある人の名前が挙げられた。

昨日の夕方以降に部屋に入っていて。

旅人でも見たことのない不思議なものを持っていきそうな人。

「……アラシ……」

「隣村までの地図を1枚」

「はいよ」

朝食を済ませ、私は村の本屋に向かった。

そこで、隣村までの地図を買う。

次は水を買に行つて。

そして昼には森に着いて……

「アンタら、旅人だろ？」

おじさんが地図を持ってきた。

硬貨を出して、それを受け取る。

軽く中身を拝見してから、さっきの質問に答える。

「そうですけど……。アンタ“ら”ってどういうことですか？」

「昨日の昼……だっけな。アンタくらいの少年がここに来たんだよ。

アンタからくらいの旅人も珍しいが、その旅人が2人もこの村にいる

なんてな……」

私くらいの少年……。

「その人、どこにいるか知ってます？」

「さあな。ただ、アンタと同じ地図を買ってたな」

女房が朝食だとするさいから行くな、といって奥の扉に入っていっ

た。

どうやら、扉の奥に奥さんがいるんだろう。

……そんなことより。

おそらく、あの人は私と同じ場所に行くんだろう。

森を抜けて、隣村まで行くんだろう。

貴方は一体、何なの——……？

第5話

森に入って1時間がたった。

あまり太陽の光が入ってこない森は、さっきからほとんど景色が変わらない。

1時間歩きっぱなしはさすがに疲れる。

川で休もうと思う。

地図と方位磁針を確認しながら、足を進める。

やっぱり、足は痛い。

そろそろ限界だ、そう思ったとき。

「……水？」

遠くに水の音がした。

かなり遠いが、川が滝がある。

地図を見ると、音と同じ方向に川が描かれていた。

少し、足が軽くなった気がした。

10分ほど歩いたか。

水の音が大きくなる。

音を頼りに、水の音がする方へ歩く。

すると、木と木の間から水が見えた。

足早にそこへ向かう。

河原に出た瞬間、急に周りが明るくなった。

眩しくって目を細める。

川は泳いで渡れるほど、浅くて狭かった。

足の痛みを忘れて走り出す。

川は透明で綺麗だった。

光が反射している。

地面に座り、靴を脱いで、川の中に足を入れた。

足を動かして水しぶきをあげる。

「……ふう……」

一気に疲れが出る。

水があつてよかった。

鞆を私の方に手繰り寄せ、そこから水を取りだして飲む。
渴いた喉が潤う。

気持ちよくって上を向きながら目を瞑る。

鞆の中から、次は1枚の青い布を取り出した。

それを水に浸し、細長く畳んで、目の上に乗せた。

最初は冷たいが、だんだんと馴れてくる。

休憩のときは、すべてを忘れてゆつくりできる。

あと少しだけ、こうしていたい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0038y/>

この先にあるもの

2012年1月7日16時46分発行